

書籍紹介

『ドゥルーズ派の誕生』

菊地達也著、刀水書房、2021年7月4日、5000円+税」

本書は東京大学大学院人文社会系研究科准教授の菊池達也氏によってまとめられた貴重な学術書である。著者はイスラームの少数派の思想に関心をもち、『イスマーイール派の神話と哲学』(岩波書店、2005年)というイスマーイール派の思想・哲学に焦点をあてたわが国で最初の膨大な研究書を上梓している。本書はこれに続く形で、イスラームの「極端派」(グラート)のひとつとされるドゥルーズ派の歴史とその教義の成立過程に焦点をあてた詳細な研究である。これらの少数派の研究はごく最近まで限られていて、聖典などの内部資料に手を付けることすら不可能であった。イスマーイール派にしても、その聖典や文書類が外部で公開されるようになったのは、20世紀も後半になってからであり、ドゥルーズ派に至っては、21世紀近くになってようやく少しずつ公開されるようになったばかりである。

11世紀はじめにイスマーイール派から分離し、シリア・レバノン地方、近年にはイスラエルにも展開したドゥルーズ派は、現在では総人口100万人という弱小集団でありながら有力家系を中心にして、シリアやレバノンの政治的バランスにも大きな影響力をもつ勢力になっている。1975年に始まったレバノン内戦では、私兵集団を擁してキリスト教徒のマロン派集団との権力争いなどで対立する場面も見られた。

しかし、その教義には特異性と秘儀性が強く、外部へは秘匿される傾向にあったが、20世紀後半から同派の信徒の中からドゥルーズ派の歴史や思想を外部に語る者が現れはじめ、その教義や歴史が次第に明らかにされるようになった。同派の信徒は創始者ハムザたちによる書簡『英知の書簡集』をクルアーンに代わる聖典として門外不出としていたが、著によると、これも19世紀以降、フランスを中心に西洋の学者によって研究が進められるようになり、20世紀後半にはさらに思想的研究が促進されたという。

本書は副題に「聖典『英知の書簡集』の思想史的研究」としているように、ドゥルーズ派の創始者であり、初期の教義を打ち立てたハムザ・イブン・アリーの『英知の書簡集』を中心に研究することで、ドゥルーズ派思想の原点を解明しようとしたものである。『英知の書簡集』は長らく秘匿されていたが、その聖典原文の前半部のみではあるものの、21世紀に入って2007年に公開され、同時に仏訳も発表されている。

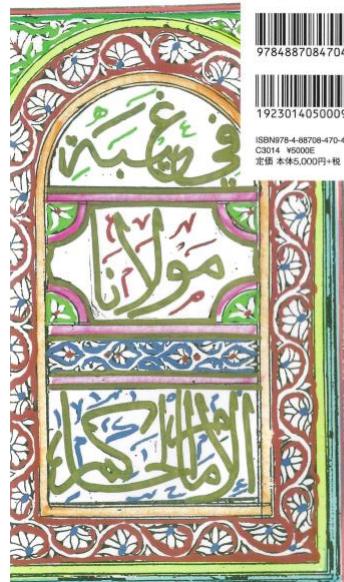
著者は、これらの貴重な原典資料を丁寧に紐解き、ドゥルーズ派思想の成立について検討を重ねてきた。この思想は、イスマーイール派思想から大きな影響を受けて成立したものであるが、この両派の間にはどのような連続性があり、どのような点で対立があったのかについても、いまだ明らかにされていない。

本書は読者のために、研究課題を丁寧に区分けして、難しい論点を読みやすくまとめている。研究史から始まり、極端派の解説、この宗派の源となったイスマーイール派の神話の解説、ドゥルーズ派の世界観、この派に独自のメシア論、輪廻思想と信仰偽装（タキーヤ）論へと理解への道筋を巧みに導いてくれる。「タキーヤ」とは、特定の信仰を持つことによって、同じ宗派の人々や自分や家族とに重大な被害が及ぶ可能性がある場合には、周囲の多数派に同調して、自分の信仰を隠すことを指し、シア派、イスマーイール派などの少数派に許容されている行為を指す。

本書は日本で初めて出版されたドゥルーズ派の思想と哲学の研究書であり、正しく理解するためには、概要だけでもイスラーム思想史の知識が必要であり、決して読みやすいものではない。しかし、133 頁という比較的短い頁数にうまくまとめてあり、手に取りやすい。

ごく最近まで秘匿されていた聖典『英知の書簡集』の最初の文書の表紙がカバー装画に掲載されているが、これも長年秘匿されてきた聖典としては、不思議な美しさがある。表裏をスキャンしてお届けします。

（塩尻和子）



ドゥルーズ派の誕生 菊地達也

ドゥルーズ派の誕生

聖典『英知の書簡集』の思想史的研究

